

## 第3回滋賀県産業振興審議会 会議議事録

### 1 日時

令和元年5月29日（水）15時00分～17時00分

### 2 場所

長浜市役所 1階多目的ルーム（滋賀県長浜市八幡東町632）

### 3 出席委員

【委員】安達 みのり委員、飯田 敏之委員、大日 常男委員、大島 節子委員、  
上村 透委員、小玉 恵委員、西藤 崇浩委員、島 裕委員、  
田中 美咲委員、辻田 素子委員、夏原 行平委員、平尾 道雄委員、  
廣川 能嗣委員、坊垣 佳奈委員、松井ライディ貴子委員  
（18名中15名出席）

【オブザーバー】滋賀経済同友会、一般社団法人滋賀経済産業協会、  
公益財団法人滋賀県産業支援プラザ

【県】由布副知事、森中商工観光労働部長、中山商工観光労働部理事、他関係職員

※ 敬称略、五十音順

### 4 内容

#### ■開会

（1）副知事あいさつ

- ・第3回滋賀県産業振興審議会を長浜市役所で開催することができましたことにつきまして、御礼申し上げます。
- ・前回御議論いただいた論点整理を受け、SDGsを踏まえた骨子案をお示しさせていただき、皆様と意見交換をさせていただきたいと思う。

#### ■議題

（1）滋賀県産業振興ビジョンの骨子案について  
（資料2および3に基づき事務局から説明）

（会長）

- ・それでは、骨子案に関する意見交換、議論の時間としたい。については、論点ごとに皆様

からご意見、ご質問を頂戴し、議論を進めてまいりたい。

●論点1 ビジョン全体の構成について

(会長)

・今回、事業者の方の理解促進のため、県の産業振興のコンセプトを明示し、「ミッション・ビジョン・バリュー」で整理したうえで、バックカスティングの手法により骨子案を作成した。このような整理は、事業戦略を考え、実行していく上で有効に働いているのか。企業経営の立場から御意見をお伺いたい。

(委員)

・バックカスティングは我々も実はやっている。10年後15年後どうありたいかを描いて次の3年の計画を作るようにしている。絶対この方法でいくべきだと思う。

・4ページにあるような表現は企業ではよく行っている。企業の者からみると何の違和感もない。

・今回初めて新たなチャレンジが日本で一番行いやすい県というキャッチフレーズが出てきており、共感したが、気になるのは3ページにあるチェンジへのチャレンジを応援とある「応援」である。県も一員であるのになんで応援しているのかと感じる。これは皆で実行する話である。

・「チェンジへのチャレンジ」という言葉は非常に良いと思う。

(会長)

・考え方としてミッション・ビジョン・バリューで描くのは違和感がないだろう。チェンジへのチャレンジを応援とある「応援」が気になる。県も一緒にやるべきというお話であったと思う。

(委員)

・委員が言っているようにミッション・ビジョン・バリューを表現するのは企業では一般的である。ここがしっかり共有されることで、その他の部分がきちっと進んでいくと考えている。

・バックカスティングのところについては、どんどん社会が変わっていく中で何をもって10年後20年後を見据えるのは大変であるが、今やっていかなければならないものが見えてきている中では、県としてしっかりバックカスティングという手法でやっていくというのは分かりやすい。

・「応援」について言及があったが、実際に動くのは県の企業であるということは理解するが、県として何をするのかを明確にするべきである。

・具体策のなかで細かく出していくのであろうが、「応援」という文言にこだわるかどうか、というのは気にはなる。

(委員)

・5ページにあるバックカスティングには大賛成である。フォアカスティングで改善

策を積み重ねる時代ではないというのは明確であるので、目指す姿をもっと明確にするべきである。明確にした上でのバックキャストिंगではないと意味がない。

- ・ 2 ページの SDG s の取組が滋賀県、滋賀経済同友会において日本の中でも非常に進んでいると注目されている。足元では様々な企業が SDG s 宣言（同友会加入の企業では数十社）されており、それを実践していただく必要があり、何を実践するのかというなかで 17 の目標があるが、全て企業活動に落とし込むのは非常に難しい。

- ・ 4 ページの一番下にある※の目標 8 は非常に大事であると考えている。滋賀の企業に就職する学生が減っており県外への就職が増えている。せっかく県内で就職しても中途退職される。どう働き甲斐のある企業に企業自身になっていくか、そこには経済成長が大前提となっているが、働き甲斐もあり経済成長できるビジョンとすることで県内の学生が県内で就職する、もしくは県外から滋賀県の企業に来てもらえる流れになっていき、目指す方向に進んでいけばベストではないか。

（委員）

- ・ バックキャストिंगの考え方は勿論必要であり、バックキャストिंगにすることで自治体の強みである、決めた目的に対しての処理能力が出るだろうが、決めたこと以外のことできなくなってしまう弱みが出てしまう。その瞬間瞬間のチャンスを掴むことができないうのがバックキャストिंगの弱みなので、バックキャストिंगだけに絞るのはナンセンスであると感じた。

- ・ 時代の流れとして SDG s は古く、どちらかという今はサーキュラーエコノミーの文脈が流行しており、サーキュラーエコノミーのなかでの SDG s やシェアリングエコノミーなので、もう SDG s に執着するのは古い。

（委員）

- ・ その答えが 14 ページにあるのではと思う。PDCA の考え方でなく OODA（ウーダ）という考え方だろう。OODA という考え方は範囲を広げて決めないといけませんが、まず、最初は観察、状況分析、判断、実行の流れである。「検討します」と記載があるが微妙な表現である。PDCA と OODA のどちらが良いのかよくは分からないが、OODA もうまく取り入れるのだろう。

（会長）

- ・ 時代とともに状況が変わっていく中で、2030 年を描いたところで、今はいいが 2030 年に本当に意味があるのかという議論であったかと思う。

- ・ また、描いた未来の姿だけを目指していくと、全然違う方向になったときに軌道修正できなくなるという御指摘であったかと思う。

- ・ そういうところを加味して、本当の滋賀県の発展につなげていく行動に落とし込んでいくのか、時々刻々と状況が変わることをうまく取り込めないかという話であったかと思う。

（委員）

- ・ バックキャストिंगだけの議論だけでは済まないと思っている。10 年前といえばスマ

ホが出始めた時代で、スマホを使っている社会の状況を予想できたのかといえば、予想ができないわけで、これからの10年どういうことが起きているのか、どういう価値観になっているのか、必ずしも正確に予想ができない。

・SDGsで、滋賀県ならではの考え方が大切だと思うのは、未来への影響を洞察するという姿勢ではないかと思う。今やっていることの延長線上にどういう未来があるのかをきちんと考えた上で、未来からの反射という形で今のありようを考えるとという循環が滋賀ならではの感じる。フォアキャスティングはある意味自然未来であり、将来に対してどうありたいかという意味未来が目指す姿で、現在どうするのかというサイクルがどう回るか、という点が非常に重要なのではないかと思う。

・4ページにある図は、企業的にはそのとおりだが、このメッセージの主語は誰で、誰に対するメッセージなのか、県民なのか、県の企業なのか、あるいは世界なのか、メッセージの相手方をイメージしながら、どういメッセージを滋賀から発信していくのかという視点も全体の構成としては大事であると思う。

(会長)

・構成としてはいいが、作ってしまったら終わりではなくて、そのまま走らず適宜うまく軌道修正していけるような工夫をどこにつけるか。スパイラルアップの図があるが、定期的に見直し、うまく軌道修正して実効性のある計画に落とし込むのかという話であったと思う。

(委員)

・中長期のミッション・ビジョン・バリューはあるべき。時代に即して変化がかなり求められるので、このタイミングで見直すということを決めておくべき。そのタイミングでビジョンも見直し、それに合わせて短期の計画も見直す。短期の計画はありきでフォアキャスティングをやらないという話ではないと思うので、バックキャスティングのビジョンを見直すタイミングを決めるべきだと思う。

・また、「応援」という言葉には自主性を感じない。どういう姿勢で誰に向けてによって変わるだろうが、県がビジョンを持ってやっていく声明だと思うので、「応援」はおかしいと思う。「応援」に変わる言葉は、実働されていく皆さんでキーワードを出し合って、考えてみるのがいいのではないかと思う。

(会長)

・全体としての構成は良いだろう。

・「チェンジへのチャレンジを応援」というメッセージの主語は誰か、をしっかりと意識することと、「応援」という言葉に主体性がない。

・バックキャスティングも良いが、フォアキャスティングで進めることも否定しているわけでない。どういタイミングで見直すのかというプランニングもしておく必要があるだろう。トータルのビジョンを見直し、中期的な計画も見直して、ブレイクダウンして年度計画等も見直し。まずはバックキャスティング的な発想で作っても良いが見直しタイミン

グは明記しておこうというお話だったかと思う。

●論点2 滋賀県が有する特徴について

(会長)

・次に、2つ目、「滋賀県が有する特徴について」である。先ほども申し上げたが、社会・環境が変化し、従来の滋賀の強みや優位性が変わりつつあるなか、滋賀らしきを生み出すためにご議論をお願いするものである。企業のみならず地域と連携、協働したオープンイノベーションが全国各地で進むなか、県外から滋賀県を見られて、滋賀県のポテンシャルはどうか。国内各地で支援を行って来られた立場から御意見をお伺いできればと思うがいかがか。

(委員)

・10 ページのベン図は小さな集合を狙っていくように見えるが、もっと広く対象を捉えるべきではないか。つまり、融合領域のみに焦点を当てるのではなく、第1次産業、第2次産業、第3次産業全体で、重なる部分も重ならない部分も含めてそれぞれが新しい価値を創造すると見るべきだろう。Society5.0は創造社会であるから、いずれにおいても創造社会という文脈で整理をすると、今のイノベーションの議論と合ってくるのではないか。

・滋賀の特色として、インフラで感じたのは、創造社会を考えると一番のインフラは人。人が必ずイノベーション・創造をするから、人材インフラというものが、滋賀の大きさ・資産ではないだろうか。

・自然環境、サーキュラーエコノミーを歴史的に重視している点、人と人との結びつきが首都圏や関西圏に比べて違って密度の濃いコミュニティーを持っている点、経済的にもローカルすぎず都市経済が成り立つ点、など人が活躍する場として見ると滋賀は一つのモデルとなり得る存在ではないかと感じた。

・最近オープンイノベーションの議論の中でよく出てくるのは倫理。何が正しいか、という議論がとても大事である。例えば再生医療の話も遺伝子組み換えの話もそうであるし、GAF Aが個人情報を集めすぎるのは正しくないのではないか、日本でも規制すべきではないか、という話が出ている。まさにこういう中で何が正しいのか、何をやってはいけないのか、という指針が重要という議論がイノベーションの各所で出ている。アカデミーから政府内でも議論が進んでいる。

・また、倫理から新しいビジネスが生まれているのも事実である。SDGsも一つかもしれない、金融の世界ではESG投資等が進んでいる。環境に良いということで世界中で2,100兆円のお金が動いている。日本は50兆円程度である。会計分野では統合報告があり、経済報告以外のディスクロージャーが重視される、という文脈のなかで、何が正しいのか規範を作っていくことが、イノベーションの中でトレンドになっている。

・中国はサイエンスとしてのアカデミーを大事にする姿勢を示すアピールをしている。何が正しいのか、それぞれ価値観は多少違うがそこに向けて頑張らないかというメッセージ

を出している。EUは従前からそういう色彩が強い。

・振返ると滋賀はSDGsの文脈で何が正しいのか、サーキュラーエコノミーとしてあり方はどうなのか、大きな大企業が終身雇用は維持できないと言う、一方で人生100年時代という中で働き方をどうするのか、QOLをどうするのか、ここが今非常にぼんやりとしていて、一人ひとり何を指せばいいか良く分からない。

・それに対して滋賀にはこういう空間がある、受け皿がある、こういう生活環境があるというメッセージは、県内だけでなく世界へも一つの価値観を発信するチャンスになるのではないか。

・先般、京都宣言があったが、まさに今混沌とした働き方、倫理観というものを滋賀エンゲージメントとして世界に発信するなかで、県民または外の人が、滋賀ってこういう特色があるのか、こういう環境があるのかと改めて知っていただく、そういうメッセージになれば良い。

・全体として滋賀県は今のイノベーションという文脈の中で、何が正しいのか、何を指すのかを発信しやすいお土地柄、特色があると感じている。

(委員)

・滋賀県は、スタートしにくい環境だったと強く感じている。かつ資金調達もしづらい。同じ内容を東京で提案したら、額もチャンスも変わった。東京のほうがチャレンジしやすかったというのは事実としてあったので、そこはとてもしっかりしたい。

・滋賀の既存企業が活躍していることは素晴らしいが、新しくチャンレジする若手たちの土壌ではないと感じる。

・今回の新しいコンセプトと逆行するアイデアを申しているが、既存の企業がどのように活躍するのかという視点のほうがいいのではと思う。

・もしチャレンジャーを増やしたいなら、若手だったり今はまだ何もしていない思いがある人がチャレンジしやすい土壌をかなり作り込まないとボトルネックが多いと思う。

(会長)

・滋賀と東京の違いで言えば、行政のサポートが東京と比べて悪いのか、金融を含めて民間のサポートが悪いのか、あるいは人材が様々なことを協力しあえるから東京がいいのか、何が違いでポイントになるのかを教えていただきたい。

(委員)

・おそらく全部である。

・商工会議所や青年会議所が存在することも知っているし、色々な仕組みを用意していることも知っている。接点が少なすぎるのと、チャレンジする人が集まる場がないので、一人ひとりがネットでかなり調査を行わなければならない、商工会議所に出向かないといけない等ライフスタイルと現場の位置づけが大きく異なっていた。

・私も青年会議所や商工会議所に関わったが、入らないと情報がもらえない。私の周りの滋賀で起業した人は一切入らずネットで自分で調べて、多くが東京に出てしまっている。

・企業連携においても若手は下に見られていた感じがした。既存のルールのもと評価されていた。新たな市場を評価されていなかったり、お金という価値でしか評価されなかったと強く感じた。お金になる前のアイデアやシードの段階だったり、芸術だったり作品に評価されないと感じた。

(会長)

・周りに住んでいる人達も変わっていかないと、イノベーションが起こらないという認識でよいか。

(委員)

・弱いところを強みに変えていくのはかなり時間がかかる。強みになりそうなところ、他の県と差別化してここは滋賀のいいところだといえそうなところを伸ばす方が早いと思う。全員を底上げするのは難しいので、強みを伸ばすという考え方のもと、できるところからやるほうが、イメージするところへの到達が早い。

(委員)

・接点を持つことが難しいのは甲賀市でも長く感じている。起業家を支えるため行政が女性のための勉強会（創業塾）をやってくれた。いつもは夜やっていたのを昼間に開催してくれたり、民間でもどういう強みがあるのかという勉強会を開催してくれたり、行政、民間また商工会という連携が少しずつ2、3年、時間をかけて進んでいくなかで接点は持ちつつあると感じている。

・地域よっての違いがあったり、そこにはキーマンがいたりする。滋賀の強みは、つながり、人が温かくてつながりやすいという点だと感じている。

(会長)

・つながりが強みということだが、外から来た人は入り口が良く見えない。

・つながってみればものすごく強力だが、接点をどこに求めるか、行政がしっかりとつなぐべきというお話だったかと思う。

(委員)

・グローバルニッチNo. 1というキーワードで事業運営しているが、自分の強みを生かさないと駄目だと感じる。

・自社では、中途（キャリア）と新卒（プロパー）がいるが、プロパーでいる人が見えている自分の強みと、キャリア採用で入社する人が見る強みは違う。ずっといると見えない強みがあったりする。

・滋賀県が京都や東京と見比べて、向こうの強いところを叩きに行こうという考えは多分難しいだろう。

・滋賀県の持つ強みを、ずっといる人、外の人から見た強みの両方から強みを生かして、ビジョンに向かってどうするか、と進めていくべきだ。

・グローバル製品が多いのになぜ滋賀で事業運営しているのかとよく聞かれるが、世界に物を発信するなら滋賀も東京も誤差である。そうであれば働きやすい滋賀で運営を行った

ほうが良い。強みを徹底的に見直すべきだと思う。

(委員)

・特に若い世代は、いかにサステイナブルか、どういった暮らしをして、どんな文化があって、いかに環境に負荷をかけない生活が行われているか、ということに興味をもっている人が非常に多い。

・お客様（外国人）が自社のツアーに参加した理由は、いかにも観光地でなくて普通の人の暮らしが分かって、琵琶湖や山や川があって、そういうところを見たいとのことだった。明らかに京都や東京と比べて、滋賀県は強みが多くあると思う。

・特に海外に向けての発信では、他県よりサステイナブルやウェルネスを強調してPRしている県ではないか。一番乗りして、どこの県よりもいち早くそこをPRしていけばよいのではと思う。

・しかも、名古屋、東京、京都にも近い地の利をうまく活用すれば、もっと世界から注目される地になるのではないか。

・滋賀県の最大のインフラは人ではないかという話があったが、インフラ＝人ということに合わせて、滋賀が魅力を世界に発信できる余地があるのではと思っている。

(委員)

・行政に携わっているなかで、地域の賑わいや元気を作ろうと言っているが、自分の生い立ちをみたときに、頑張れ、勉強しろ、できたら良い学校に入れ、いいところへ就職しろ、偏差値という言葉もあったし、それをずっと追いかけてきた自分の人生の反省がある。今思うととんでもないことだったと感じている。

・実は湖北地方には「土徳」という言葉がある。その背景には宗教観がある。信仰を持っている人がしっかりいる。信仰を踏まえて人を育てているという自負がある。上質な品位や人格を一番に滋賀県で作っている、そこはかなり投資もしている。

・その背景は、仏教文化の中継地であるということもあり、グローバルに世界に情報を発信していく際に、生産や商品、ビジネスだという言葉は勿論使っていきたいが、その根底にあるのは、人をかなり大事にしている、優しい人を作っているし、人のために頑張る人を育てている、ということを含めて、人を一番にしているのだということ弱くも強くもなく、ずば抜けて滋賀はやり続けているという旗印を上げられるとしたら、そこからまさに上質で皆が集まり、ビジネスチャンスが生まれてくるのではないか。

・明日儲かればいい、10年後になんとかいい目にあおうという発想を否定はしないが、どうもそんな時代ではなさそうだという感じがする。そういう意味を含めて価値観、倫理観を滋賀県が作っていければ素晴らしいのではないかと思う。

(会長)

・よく言われる三方よしの精神のことを含めてという理解だったかと思う。

(委員)

・倫理観や価値観等は滋賀県がやるべきことだし、世界に誇れることだろうと思う。9ペ

ージにはないが、この中に入ってきてもいいのではないか。5つの図で産業基盤の集積について、これまで滋賀県は製造業が盛んであったがこれ以上製造業だけで生きていくのは難しい。

・深圳のように製造業があつて新しいサービス産業が発展し、そこで働きたいという若者が世界中から集まった。深圳とは一味違う倫理観なり価値観なり人としての生き様が、世界に誇れるようなそういう空間を作りつつ、北京とも深圳とも違う新しいモデルが作れば、既存企業や既存企業と絡みながら新しいことをやりたい人達が次々と集まって来るのではないのだろうか。

・全ての起業家を応援するのは難しいと思うが、製造業と絡めながらや、SDGsに関心が高い起業家等ある程度絞り込めば、限られた地域資源のなかで十分に対応ができ、世界とも競争できると感じた。

(会長)

・「滋賀県が有する特徴について」に関し、由布副知事も内閣府から滋賀県に来られているが、いかがか。

(由布副知事)

・強みは、自分達の地域や県、住んでいるところを自分達の力で良くしていこうというお気持ちが非常に強いことだろう。必ずしも行政に頼るのではなく、自分達でなんとかしていこうという姿勢が大変強い。歴史的にも様々なことがあつたがそういうことが強みであるし、人材がいる地域には色々な人を繋げながら自分達の力で地域を良くしている人が非常にたくさんいることは強みなのではないか。

・他方、さらにブラッシュアップしたほうがよい、進化したほうがよい点もある。それは、人口減少や人口流出を背景に、多くの人に滋賀を選んでもらえる、また、そこにいる方の力を活かす。そのためには、ダイバーシティといった、既存の価値観ではない新しい価値観を受け入れて活かしていくことがもっとあると、滋賀という社会は活力ある社会になっていくだろうと感じている。

(会長)

・人や人間性が滋賀の魅力であり、いかにネットワークにつなげて滋賀を盛り上げるか。  
・個人の感覚としては滋賀県としては、住むのには良く、職住が接近していて楽しむこともでき、仕事もでき、環境は素晴らしく山にも行け湖もある。余暇も楽しむ仕事も楽しむ、人間としての生活ができる実感がある。その辺に住んでいる人の良さ、倫理観につながってくるのではないか。これがキーワードで、職住接近で人間らしい生活ができる観点で上手く情報発信できれば、もっと人が集まってきて、観光資源にも人間性を見て頂くこともできる。

・京都や東京の派手さはないが、理解してもらおう人が来て頂ければ、どんどん広がっていく、その辺がポイントであると思う。

### ●論点3 産業振興の基本的方向について

(会長)

- ・最後に、3つ目、「産業振興の基本的方向について」である。
- ・県で製造業を続けていく上で、SDGsという視点を踏まえながら県の産業支援にどういったことを期待するかご意見をお伺いできればと思うがいかがか。

(委員)

- ・SDGsの観点からいけば、自社では水をたくさん使い、琵琶湖に排水するので琵琶湖の条例基準より10倍高い数字で管理している。
- ・環境的な面で配慮をしている。また、その中で企業として様々な投資をしていかなければならない。滋賀県は本当に優秀な製造業がたくさんあるので、こういったところが滋賀から世界へ行くのに、補助金だけでなく、滋賀県にはモノづくりの支援機関がたくさんあるが、そういったところがもっと各企業に対して、どういったことをしていったらいいのかというアドバイスをどんどん積極的にしてくれれば、もっと広がっていくのではないかと感じる。
- ・滋賀の特徴は、春夏秋冬がはっきりしていることである。風光明媚なところで素晴らしい環境がある。琵琶湖は世界でも知られている。
- ・琵琶湖を活かし、強みにして行って欲しいと思う。若者が琵琶湖の湖岸でそれぞれ遊んでいる様子を見ていると、高島市では、マキノ、今津、高島、新旭あたりでSUPやカヌー、ペーロン大会が行われている。キャンプができるところもあり、そういったところをきっちり整備しミニヨット教室を開く等、人を育てることができると思う。
- ・啓蒙というキーワードでも、登校拒否の子供とか自律神経が弱っている人がかなり多いと聞くが、そういったスポーツをやればすごく強化がされて自立心がついていくと言うこともよく聞く。そういったことを琵琶湖という強みを活かしてやっていけば、たくさんするのではなく水を綺麗にするということも一つで、SDGsに繋がっていくのではないかなと思う。
- ・全国の経営者の仲間では、滋賀に来たいという人が多い。環境が良い、美味しい物があるのでもっと人を呼んでこようと言ってくれる。
- ・滋賀をPRできる方法はたくさんある、と思う。

(委員)

- ・私が実感していることは、滋賀は、村的なつながりは強く大事にする美しい風土があるが、新しいものや多様性を受け入れることに弱点があると感じている。まさにこれからの滋賀を考えたときに、多様性を受け入れることなしに未来を作れるのかなと思うと、ビジョン策定のなかで新しい多様性を受け入れつつ、チャレンジする人が集まるプラットフォーム等具体的な分かりやすいものを、基本的な方向のなかに具体的に入れていかなければ実になるビジョンがつかれないのではないかなと感じた。
- ・健康しが、という点は他にない長寿の地域になっており、例えば滋賀は京都の台所の役

割を果たしている。京都は雅の文化であるが滋賀は田舎の台所の美しい文化があるし、滋賀にしかない美しい自然と村的なつながりを強みとして、食の安全・安心、オーガニック等の運営支援を取り入れていけばよいのではないかと思う。

(副会長)

- ・スタートアップしにくい県かもしれない。経済人としてもできることには限界がある。資金力となると大阪、東京になってしまう。
- ・変化するから 2030 年を決められないという意見もあった、したがって見直す時期も明確にしなければならないという意見もあった、そのとおりである。
- ・しかし、今私たちが求めているのは、理念だと思う。滋賀の強みを活かして、何を求め、特に若い人達に入って頂けるような県にする。その具体化だと思う。
- ・不変と革新と連携と同友会は言っている。不変：変えてはならない滋賀県の強み。革新：AI、IoT等今後乗り越えていくべき新技術に対応しなければならない。連携：企業と企業、行政と個人との連携ということ。
- ・応援でもめたが応援ではない。県は社会基盤（プラットフォーム）作りをするのが県政ある。プレイヤーは個人であり企業人である。社会基盤を作るのが県。チェンジへのチャレンジができる社会基盤を作るのが県の仕事である。
- ・滋賀県で企業を起こす阻害要因はなく、東京も大阪も一緒である。若者、馬鹿者、よそ者が地方創生に必要と言われている、正に多様性を受け入れる事が必要。多様性のある人達を受け入れる土壌がある滋賀が必要。まだまだまとめるには早い、そういったことを網羅できている県が、人を呼び込める。人口減少と副知事も危機感を表明された、だから県外から移住者を増やす必要がある。
- ・人が移住してくる県を作ろう、というのが根本的な思いだと思う。
- ・滋賀県には、強みが一杯ある。若い人を呼べるような土壌には自然環境という要素が間違いなく重要である。
- ・人のインフラ、素晴らしい発想である、滋賀県には素晴らしい人材が豊富に居られる事の強み。また「土徳」との言葉があった素晴らしい言葉で滋賀の土地を表す言葉として最適である。そして「近江聖人の中江藤樹」これこそ滋賀の仁徳と言うべきである。

(委員)

- ・10 ページの基本的方向の図において、1 番大事なのは、ポイント3に書いているように滋賀県の様々な産業・企業・人がつながるにある「つながる」という点が非常に重要である。滋賀の個別の企業も第1次産業であっても、第2次産業であっても、第3次産業であっても異業種であってもいいのだが、つながるところにビジネスチャンスがある。そこから新たな企業がスタートアップすることもある。
- ・滋賀県では、2015 年に公表されたデータによれば廃業率が高いとあり、これは問題であるが、新規の開業率が低く、こちらのほうが問題である。廃業率が高いが滋賀県は恵まれているので、廃業しても食べていけるということだと認識しているが、開業率が低いとい

うのは将来のことを考えると非常に問題である。だから県としての産業振興の基本的な部分に、つなげるという部分のプラットフォームを作って欲しい。

- ・銀行としてビジネスマッチングもやっている。既存事業の延長の売り先や仕入先を紹介するといったことをやっている。追跡調査をすれば、必ず企業価値があがっていくというデータが残っている。

- ・ビジネスマッチングと新規の創業に取り組んでいかないと、働き甲斐も経済成長も、というところに繋がっていかない。

(会長)

- ・他にご意見はあるか。

(委員)

- ・基本的方向は良い言葉が並んでいる。ウェルビーイング、健康しが、実装のメッカも異論なし。

- ・人材育成で、革新していかないといけない部分で、特に第1次産業、第2次産業、第3次産業が創造していく新しい価値を生み出すときにどうしてもAI、IoT、ICTといったテクノロジーが必要になってくる。倫理というのはサイエンスをベースに考えるというのが基本である。

- ・サイエンスを支える人材をきっちり育てる、実証も企業だけの実証ではなく、これだけ多くの大学、京都にまで足を伸ばせば多くの大学、研究機関もあるので、そういうところの若い方々がフィールドスタディーをするなら滋賀がやりやすい、モデル的な研究の場所があるという認識につながれば良い。

- ・若い方、シニアになっても人生100年ずっと学び続けるという文脈の中で、人材をつくるという機能、つなげる機能と合わせて重視するべきだと思う。

- ・京都から都が東京に移ったときに若者がいなくなり、その後京都の財界、経済界が行ったのは人材育成。学校を作る、テクノロジーを輸入する、デザイン／美術という新しい価値作りの種まきをする。そういうことを混沌とした社会の中で滋賀がリードしていくべきだろう。

- ・若い人は早いタイミングで離職する。3年くらいで辞める人が本当に増えてきている。話を聞くと、給料のために働くのではなく、社会貢献、社会インパクトを求める人が増えている。それに加えて経済価値をどう生むのか、という解を世界中が探しており、どこに投資をするべきか、指針をどう示せるのか、というのが非常に大切な視点である。

- ・定住人口でも、交流人口でもなく、活動人口をどれだけ増やしていくのかも重要である。

(会長)

- ・オブザーバーからもご意見をいただければと思うがいかがか。

(滋賀経済同友会)

- ・SDGsはあくまで手段である、それをどうやってつないでいくか、循環型社会を考える、というところが重要なテーマである。

・未来のビジョンを考える中で、そういった部分が少し足りないのではと感じる。その前提にあるものは、滋賀県にある石けん運動というフィロソフィーというのが、県民の皆に浸透したフィロソフィー、これが社会課題を解決しようとしたフィロソフィーである。こういうフィロソフィーでトランスフォーメーションをどう起こすか、というところを持っていかなくてはならない。大切にすると、大きく変革するものが大変重要になっており、フォアキャスト的な要素が強いという印象を受ける。

・一番大事なのは、これからデジタルというところである。デジタルプラットフォームをどう作っていくのかが大変重要なテーマである。これからのビジネスを考えるときに、デジタルプラットフォームをどのように作っていくか、この部分をしっかり埋め込んでいかないと、未来のビジョンにならないのではないかと。

(副会長)

・滋賀経済同友会はBIWAISMを提言している。BIWAISMは、石けん運動を原点としたフィロソフィーを持っている。これは世界に冠たる、勿論日本で初めて、環境先進県として堂々としたものであり、これは大きな財産である。

・これを内包したSDGsをも捉えてやっていこうというもので、フィロソフィーとして石けん運動を捉えている。今からでも通用する財産であり、そこらも含めて、チェンジ、チャレンジではなくてBIWAISMになってほしいという希望がある。

## ●まとめ

(会長)

・本日の議論をまとめさせていただく。

・論点1について、構成は同意であるが、文言の問題があり、定期的に見直すことを書き込もうという話であったと思う。

・論点2について、人材育成を含めた人、倫理観が強みであり、ネットワークがあるなどをしっかり認識すべきだろう、という話だったと思う。

・論点3について、事業を起こすという観点を踏まえていかないと廃業が増えて将来的に絶対に駄目になり、大企業もあれば起業家も含めて盛り立てることが必要である。どういう方向に行くのかについては、第1次産業、第2次産業、第3次産業の交わりも重要だし、それぞれの産業のなかでどう変えていくか、既存産業を新しい技術なり、デジタル等をしっかり埋め込んで活用していく、そのために、使える技術者や人も必要なので、人をいかにつくっていくか、という点も重要であるという話だったと思う。

(会長)

・由布副知事、最後にいかがか。

(由布副知事)

・本日は貴重なご意見をいただき充実し濃密な議論になったのではないかと。あらためて感謝する。

・今後、皆様からご意見を寄せていただき、さらに議論を深めていきたいと思っているので、どうぞよろしく願います。

(2) その他

(事務局)

・先ほど、説明させていただいたとおり、次回の会議は7月下旬に大津市内での開催を予定している。ご出席をよろしく願います。

・また、第4回目に向けて、皆さまのご意見をお聞かせいただきながら、「原案」を作成していきたいと考えている。

・6月以降、個別にご意見をお伺いさせていただきたいと考えているので、よろしく願います。

(会長)

・それでは、皆様よろしく願います。

・ただいま事務局から報告があったとおり、次回の会議は7月下旬を予定している。皆様お忙しい方ばかりであるので、ご出席に協力いただくようよろしく願います。

・それでは、これもちまして議事を終了させていただく。

・委員の皆様には議事進行にご協力いただき感謝申し上げます。

・それでは、進行を事務局にお返しする。

■閉会

(司会)

・それでは、これもちまして第3回滋賀県産業振興審議会を終了させていただく。